

歴史認識紛争引き起こす 新しい民族主義から脱却を

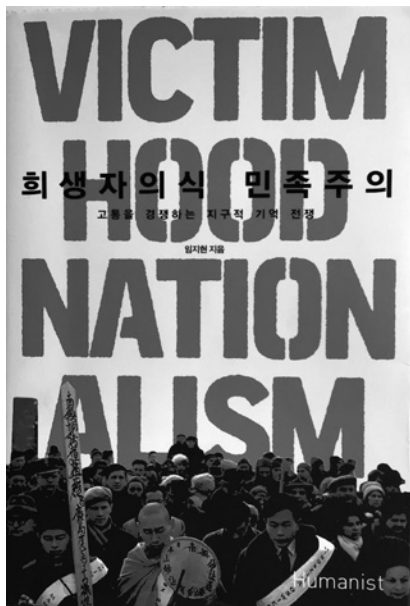
話題の書『犠牲者意識ナシヨナリズム』の問いかけ

イム
志弦 氏

(韓国・西江大教授)

韓国・西江大の林志弦教授が今年8月、『犠牲者意識ナシヨナリズム』という挑戦的なタイトルの書籍を韓国で上梓した。ポーランド近現代史研究からトランスナショナル・ヒストリー、そして人々を突き動かす歴史の「記憶」へと研究領域を広げてきた林教授は、民族主義の新しい形態として「犠牲者意識ナシヨナリズム」という概念を提唱する。

ドイツとポーランド、イスラエル、日本、韓国のナシヨナリズムを「犠牲者としての記憶」という観点から批判的に捉えた同書は、冷戦終結後に激しさを増すようになった世界各地での歴史認識紛争に横ぐしを通すものだ。既に米コロンビア大学出版会からの英訳版刊行が決まっている話題の書について、オンライン・インタビューで林教授に聞いた。



『犠牲者意識ナショナリズム』の表紙

悲劇の歴史を後の世代が継承し正当化

——「犠牲者意識ナショナリズム」とは、どう定義されるのでしょうか。

林志弦氏 先祖が犠牲となった歴史的記憶を後の世代が継承して自分たちを悲劇の犠牲者だとみなし、現在のナショナリズムを道徳的、政治的に正当化することです。非業の死を強いられた被害者が国家と民族のために喜んで命を捧げた崇高な犠牲者として記憶に刻まれる瞬間、犠牲者意識ナショナリズムが芽生えると言えます。

—— 日系米国人のヨーコ・カワシマ・ワトキンズさん

の自伝的著書『竹林はるか遠く——日本人少女ヨーコの戦争体験記』(注)を巡って2007年に米韓両国で起きた騒ぎが、この概念を考える契機になったと著書に書かれています。11歳で終戦を迎えたカワシマさんが朝鮮半島北部の町から引き揚げてくる逃避行を描いた作品で、レイプ被害にあった女性がいたなどと書かれていました。この本が米国の中学校教材となっていたことに在米韓国人が反発し、ボストンの韓国総領事館が現地の教育当局に抗議するようになって、韓国にも飛び火したんですね。『ヨーコ物語』というタイトルで韓国語版が05年に出版された時には問題視されなかったのに、この時に韓国社会の反応は一変しました。

林氏 韓国メディアが一齐に批判を始めたのを見て、不思議に思いました。批判の核心は、韓国人を邪悪な加害者、日本人を罪のない犠牲者として描くことで歴史を歪曲しているというものでした。民族的な構図で語るなら、韓国人が被害者で、日本人は加害者でしょう。しかし、個人の経験では違うこともありうる。個人の具体的な行為ではなく、集団的所属によって加害者と犠牲者を分ける報道は、「集合的有罪」と「集合的無罪」に対するハンナ・アーレントの批判を想起させるものでした。

若い少女の視線で自らの経験を再構成したこの本の叙述が「脱歴史化」の問題を抱えているのは確かですが、うそ

だと責めるのは行き過ぎでしょう。この騒動を見ながら私は、ドイツとポーランド、イスラエルによる「記憶」を巡る争いを思い出しました。そして「犠牲者意識ナシヨナリズム」という言葉を使ったコラムを韓国の英字紙に寄稿すると、多くの在米韓国人から抗議のメールを受け取りました。過剰とも思えるその反応を見て、皆が目をそらしたがる真実が「犠牲者意識ナシヨナリズム」に込められていると考えたのです。

米国という多文化空間で先鋭化した韓国系米国人の民族感情が韓国に逆輸入されて本国のナシヨナリズムを強化する現象は、ナシヨナリズムのトランスナシヨナルな性格を改めて確認させるものでもありました。犠牲者意識ナシヨナリズムという観点に立つて研究を進めると、ホロコーストと植民主義ジェノサイドの加害者であるドイツとイタリア、日本が自らの犠牲者性を強調しているという奇異な現象に出会いました。それに対してポーランドやイスラエル、韓国は世襲的犠牲者意識で武装し、加害者に奪われた犠牲者の地位を奪還しようとしています。これらは、グローバルに繰り広げられている「記憶の戦争」という同じ構図で説明できます。

慰安婦被害者が支援団体を公に批判

—— 慰安婦問題や朝鮮人B/C級戦犯問題を例に出し

で、韓国の犠牲者意識ナシヨナリズムを厳しく批判していきます。韓国では強い反発が出るのではないかと思つたのですが、韓国メディアの書評は好意的なものが多いようです。

林氏 韓国の犠牲者意識ナシヨナリズムだけを取り上げたなら、批判が殺到したでしょう。しかし、日本も「唯一の被爆国」だと犠牲者性を主張しているし、ドイツやポーランド、イスラエルも同じことをしている。どれも問題だと批判しているので、不愉快な思いを抱きながらも、どうやって批判していいか分からないのではないのでしょうか（笑い）。

元慰安婦の李容洙^{イヨンス}さんが昨年、「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」（正義連、旧挺対協）と活動家の尹美香^{ユンミヒョク}氏を公開の場で批判しました。率直に言つて、ああした批判は当事者ではない他人、ましてや私のような大学教授という立場にいる男性が口火を切るのは難しいものです。李さんはもともと支援団体の作った枠にはまらない人でしたが、あそこで声を上げてくれたおかげで韓国社会も少し変わりそうです。私の本に強い反発が出なかったのも、李さんのおかげかもしれません。

興味深かったのは、主要紙の中でハンギョレ新聞だけが私の本を取り上げなかったことです。ハンギョレは進歩的な新聞ですが、韓国の進歩派は民族問題になると非常にナシヨナリスティックになります。文在寅政権で表面化して



韓国紙・朝鮮日報とのインタビューで著書『犠牲者意識ナショナリズム』について語る林志弦教授＝今年8月、朝鮮日報提供

いる反日的なナショナリズムに問題を感じないのがハンギョレです。

—— 韓国の反日ナショナリズムでは、独立運動家の家系が語られることが珍しくありません。林教授の家系も……。

林氏 私の祖父は独立運動家で、朝鮮共産党を創立した3人のうちの一人でした。死後の92年に建国勲章を受けていますが、冷戦時代にはむしろ「アカ」扱いされています。私も、反骨の気質は受け継いでいるのかもしれない。

ホロコースト、奴隷制……絡み合う「記憶」

—— 冷戦終結でイデオロギーのたがが外れたことで、それまで封印されてきた「記憶」が欧州など各地で噴き出して歴史認識紛争を引き起こしています。グローバルな課題として日韓など東アジアで起きている紛争と同根だという主張は日本でもされていますが、なぜか西洋史研究者ばかりです。東アジア研究をしている人からは出てきません。

林氏 冷戦のイデオロギー的制約から解放されたことで、ホロコーストと植民主義ジェノサイド、旧ソ連の全体主義、米国の奴隷制、日本軍慰安婦などの記憶がグローバルに絡み合うことになりました。現実には関連がなくても、事後的にグローバルな記憶空間の中で関係性が作られた。絡み合っているのは歴史や文化ではなく、記憶なのです。

日本と韓国には、両国特有の学制という問題があります。西洋史と東洋史、自国史の三つを完全に分けて縄張りを守っている。戦前の日本の制度に起因するものです。最近では変わりつつありますが、西洋史研究の私が日韓関係について発言すると「お前に何が分かるのか」という感じでした。こういう構造が、歴史学をトランスナショナルな視点から見ると妨げているのでしょ。

—— かつてのナシヨナリズムの源泉は英雄たちの物語だったのに、それが「犠牲者の記憶」に置き換わり、犠牲者意識ナシヨナリズムが政治の前面に出てくるようになったと説明されています。英雄から犠牲者に重点が移った背景は何ですか。

林氏 冷戦終結後のグローバリゼーションと関係があります。21世紀のそれは「記憶のグローバリゼーション」です。冷戦時代には民族主義の主たるオーディエンスが自国民でしたから、英雄を強調しても大きな問題にはなりませんでした。しかしグローバル化した世界では、自分たちのナシヨナリズムの正当性を外国に理解してもらう必要があります。自国民だけでなく外国人にも自国の正当性を理解させようとするなら、英雄に説得力はありません。えてして英雄は多くの外国人を殺したり、外国から財物を奪ったりした人物ですから。

人権に関する国際的な意識の高まりが同時並行的に進ん

だ影響も無視できません。人権意識の高くなった国際社会で注目してもらおうと思えば、自分たちが大変な試練を経験してきたとアピールする方が効果的なのです。

さらに米CNNに代表される国境を超えるテレビ・ジャーナリズムの発達もありました。たとえば韓国で1991年に元慰安婦が初めて実名で証言した時には、国際的に注目されるニュースではありませんでした。日本の反応もそれほど大きくなかった。その状況を変えたのは、90年代半ばに起きた旧ユーゴスラビア内戦です。セルビア人ナシヨナリストによるボスニアのイスラム系女性に対する集団レイプがリアルタイムのニュースとして世界中の家庭に届けられ、大きな衝撃を与えました。

戦争時の性被害は昔からあったことです。それまでも事後に活字で報告されることはありましたが、人々の受け止めは「戦争の時にはそうしたこともある」という程度でした。しかし、リアルタイムの映像として伝えられたことで、こんなにひどいことが起きていると実感させられたのです。人権意識の高まりを背景に多くの人が自分たちの身に起きたことのように憤り、戦時の性暴力は人道的犯罪だという意識が強くなりました。

それが、慰安婦問題の国際化に大きな影響を与えました。00年に東京で慰安婦問題に関する（民間による）「女性国際戦犯法廷」が開かれましたが、ここにはハーグに設置さ

れた旧ユーゴ国際戦犯法廷で裁判長や検事を務めた法律家たちが参加しました。彼らの参加は、ユーゴ内戦での被害と慰安婦問題が絡み合ったことを示唆しています。

—— 尹美香氏を13年にインタビュールしたことがありません。その時に尹氏は「当初は国際社会に訴えても反応がありませんでした。それが、00年ごろから変わった。米国でも関心を持つ学者が出てきて、普遍的な女性の人権問題という扱いになった」と語っていました。その背景にユーゴ内戦があったということですね。

林氏 そうでしょう。

「犠牲の大きさを巡る競争」が起こす副作用

—— 犠牲者意識ナシヨナリズムには「犠牲の経験を持つ国家や人口集団の中で『誰がより大きな犠牲を払ったかを巡る競争』を触発する」側面があるし、犠牲者が「文化的アイコン」として消費されていくことも問題だと指摘していますね。

林氏 犠牲の大きさへのこだわりは、集団記憶に基づくナシヨナリズムの競争が引き起こした副作用です。ポーランドは第二次大戦の犠牲者数について600万人説に固執しますが、それならばポーランドに住んでいたユダヤ人とポーランド人それぞれ300万人ずつが犠牲になった計算になるからです。560万人説などもあるのですが、ユダ

ヤ人の300万人は変わらないので、これだとポーランド人の犠牲者の方が少なくなってしまうて具合が悪いのです。

米国で最初に慰安婦少女像が設置されたカリフォルニア州グレンデール市は、米国最大のアルメニア系コミュニティを抱えています。オスマントルコによるアルメニア人虐殺を経験した彼らは慰安婦問題に同情的で、少女像の設置にも助力を惜しませんでした。ところがその後、私が現地を訪れて少女像設置を支援したアルメニア系の専門家と話していると「自分たちの経験（虐殺）」と慰安婦問題を比較しようとは思わなかった。自分たちの方がよりひどい経験をしているのだというアピールでした。

犠牲者意識ナシヨナリズムという観点からは、被害者は被害者らしく、犠牲者は犠牲者らしくあることが求められます。多様な欲望を持つ平凡な人間として受け入れられることはありません。犠牲者意識ナシヨナリズムは、犠牲者たちを政治的な道具とすることによって再度の犠牲を強いる記憶の政治なのです。

イスラエルでのホロコースト研究に典型例を見ることが出来ます。イスラエルでは61年に（ナチス幹部としてホロコーストで大きな役割を担った）アイヒマンの裁判が行われます。この裁判でホロコースト生存者の証言の持つ力が注目され、証言や手記に関する研究が活発に行われるよう

になりました。そして人々は生存者たちに「どれほどひどい経験をしたのか」を語るよう、無意識のうちに、あるいは意識的に強制するようになりました。人間というのは、刺激に慣れると、より強い刺激を求めてしまうのです。「アウシユビッツでも時には休みがあつたし、中で歌を歌つたりもした」というような証言は信じてもらえなくなります。もちろんナチス・ドイツの蛮行はひどいものなのですが、極限状況の中でも人間はそれに打ち勝とうとするものです。

元慰安婦が日本兵の名前を挙げて「あの人はかっこよかった」と語ることであります。どんな環境に置かれても、人間というのはそういうものです。それなのに、そういう話には耳を貸さず、どれほどひどい目にあつたかだけを聞き続け、強制する。それは、現在の政治的理由で犠牲者たちのトラウマをほじくり返す行為に他なりません。ホロコースト生存者も、元慰安婦も、日本の被爆者たちも同じです。

自己省察を放棄した危険な道徳的正当性

—— 犠牲者意識ナシヨナリズムの危険性に警鐘を鳴らしています。

林氏 加害者が被害者を装うことを許してしまっただけなく、被害者も潜在的な加害者になりうるのだと自覚する道

を閉ざしてしまいます。自己省察を放棄した道徳的正当性ほど危険なものはありません。

典型的なのがイスラエルです。ホロコーストのようなひどい被害を経験したなら、悲劇的な経験をした他者に共感を覚えるのではないかと考えるものですが、現実はそのなっていない。むしろパレスチナ人に対して、イスラエルの一部の若者は極めて攻撃的です。自分たちはホロコーストの半世紀後に生まれたのに、自分たちもホロコーストの犠牲者なのだという意識が強い。占領地であるヨルダン川西岸に国際法違反の入植地建設を続けてもいます。それでも、ホロコーストという人道被害を受けた自分たちを非難できる人がこの世のどこにいるのかという態度なのです。

韓国人も、他国の犠牲がどれだけあつたかも知らないまま、日本の帝国主義による支配がもっともひどいものだったという話をします。しかし韓国人だって、機会があつたら加害者の側に回っていたかもしれませぬ。そういうメッセージを発信しながら、ホロコーストの犠牲になつたジプシーたちの写真展をソウルで一昨年に開いたら、ものすごい反発を受けました（笑い）。

—— ポーランドのカトリック司教団が戦後20年だった65年に、ドイツのカトリック司教団に和解を求める手紙を送つたことを本で紹介しています。



林志弦(イム・ジヒョン)氏

1959年、ソウル生まれ。84年西江大学大学院修了、西江大学博士(西洋史学)。韓国・漢陽大学教授、同大学比較歴史文化研究所長などを経て15年に西江大学教授、同年から同大学トランスナショナル人文学研究所長を兼任。16年トインビー賞財団理事。専門は欧州知性史、ポーランド近現代史、トランスナショナル・ヒストリー。ワルシャワ大学、ハーバード燕京研究所、国際日本文化研究センター、一橋大学、ベルリン高等学術研究所、パリ第2大学などで在外研究と講義を重ね、

各国のトランスナショナル・ヒストリー研究者らと共に超国家的な歴史という観点から自国中心の「一國史」パラダイムを批判してきた。現在は「記憶」研究に重点を移し、「グローバルな記憶の連帯とコミュニケーション:植民主義、戦争、ジェノサイド」研究プロジェクトを進め、記憶の連帯を通じた東アジアの歴史和解を模索している。近著に『犠牲者意識ナショナリズム』(未訳)、『記憶の戦争』(同)など。22年に米コロンビア大学出版会から『犠牲者意識ナショナリズム』の英訳と『Global Easts: Remembering - Imagining - Mobilizing』を刊行予定。

林氏 「赦し^{ゆるぎ}」という章に書きました。第二次大戦中に

人口の約2割が犠牲になったポーランドは、ナチス・ドイツの最大の被害国です。そのポーランドからドイツに和解を求めるアプローチを始めました。ここでは韓国にはひと言も触れていませんが、韓国もこうしたイニシアチブを取れるのではないかという思いがあります。韓国では、加害者だった日本がまず反省して謝罪しなければならぬと言いますが、韓国はいまや経済力でも日本と肩を並べるまじになったのですから。宗教だからこそできるのではないかと思うものの、韓国の神父たちに言っても「そんなことをしたら大変なことになる」と怖がるばかりです。まあ、ポーランドの司教たちも当時は猛烈に批判されて大変な目に遭ったのですが……。

相手の考え方知り自国中心から抜け出そう

—— この本には「記憶」について印象的な記述がいくつもありました。「過去に対する記憶は、いま作られている」という点において『現在』の歴史である「記憶は単純に過去の事実を反映するというよりも、過去を再構成する能動的な認識の作用だ」、「多くの場合、問題は歴史的事実ではなく過去に対する記憶である」といった具合です。事実は重要でないのでしょうか。

林氏 事実が明らかになったからといって、衝突する記

憶の問題が解決されるとは思えません。日本と韓国の間で「相手がうそをついている」と言うことがあります。それは合っているようで、間違ってもいる。事実に対する解釈の違いが含まれているからです。私は20年ほど前から日韓関係にも関心を持ち、歴史家同士の対話も試みました。当初は、両国に根強い自国中心的な歴史感を壊していけば、解釈の違いはあっても共存できるのではないかと考えました。

しかし、それだけでは問題解決にならないことが分かりました。そうしたこともあって記憶研究に軸足を移しました。記憶のカルチャーを変えていくことが必要なのです。

—— 結論を語る際に、「騒ぎになっていくことは沈黙より望ましい。国境に閉じこめられていた記憶が国境を越えながら出す破裂音は、自身と他者の記憶を自覚することに出てくる健全な緊張の信号でもある」と書かれています。

林氏 日本の教科書について考えてみましょう。中国と韓国は80年代初めに日本の教科書記述を問題にしました。その後、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書が大きな問題になりました。しかし私が日本の教科書を調べてみると、60年代や70年代の教科書の方が自国中心でした。私の感覚では、「新しい歴史教科書」より70年代までの教科書の方がひどい。でも、その時代には中国も、韓国も問題などしませんでした。日本もそうですが、隣国でどん

な歴史教育をしているかに関心など持たなかったからです。60年代の教科書より「新しい歴史教科書」の方がひどいから騒ぎになるのではなく、私たちの感受性が鋭敏になった証なのです。

今は少なくとも互いに関心を持つようになっていきます。東アジア域内での人々の往来が飛躍的に増えたこともあって、東アジアという単位でのトランスナショナルな記憶空間が形成されているのだと思います。必要なのは、相手の考え方を知り、自国中心的な記憶から抜け出すことです。すなわち脱領土化、脱国民化です。共通の記憶空間ができ、問題が何かを話し始めたのであれば希望は持てます。私の好きな言葉は「頭はベシミストだが、ハートにはオプティミズム」です。犠牲者意識ナシヨナリズムは、私たちの未来のために犠牲にされなければなりません。

(聞き手は澤田克己・毎日新聞論説委員)

(注)『竹林はるか遠く』

母と姉妹の計3人での逃避行の回想。朝鮮半島での苛酷な体験とともに、引き揚げ者に対する祖国の人々の冷たさが描かれている。日

本語版は2013年に出版された。